

第17回環境ボランティアリーダー海外研修報告書

麻生 翼

本研修の報告にあたり、全国のセブン-イレブンでの店頭募金にご寄付頂いた皆様やその他ご支援頂いたみなさまに心より感謝申し上げます。

ドイツでの研修の成果は僕の活動地域である北海道北部にある下川町での日頃の活動に活かしたいと思いますが、他の人に少しでも僕の経験を役立てて頂けるように、下記のとおりまとめましたのでご覧頂けますと幸いです。

- ① 訪問団体の活動やマネジメントなど、どの部分を日本のボランティアリーダーとして活かせるか。

夢を未来の「常識」に。今回のドイツ研修を通じて、そんな言葉が浮かびました。

ドイツのあるプロジェクトの中心人物に、その運営の秘訣について僕が意気込んで問いかけた時の事です。彼から返ってきた答えは、「別に、特別なことなんてしてないよ。」というものでした。その時はなんだか肩すかしをくらった気分でしたが、今回の研修で何度もそんな気分を味わうことになりました。

今回の研修では、50万人以上の会員を有し、政治にまで大きな影響力を持っている環境団体や、公立の森の幼稚園など、日本では考えられない、まるで夢のような活動を行う団体の現場の数々を訪問しました。ドイツに行く前は、さぞかし理想に燃えた人々が熱い想いで活動を担ってらっしゃるのだろうと思っていたのですが、その先入観は裏切られ、多くの方々がただ自然体の姿で、熱くというよりは落ち着いて、活動を担っていらっしゃいました。彼・彼女たちにとって、それがドイツの常識だったのです。

冒頭の言葉を聞いた時の肩すかしをくらった印象が、実は自分にとっての常識と彼らにとっての常識の違いから生まれていることに気づいた時、その常識の違いを生み出しているものは何だろうと、ゴツンと何かぶつかったような気分になりました。もちろん、ドイツの社会が完璧で、課題がいっさいないとは言えません。日本の方が優れている面も、恐らくたくさんあることでしょう。でも、ドイツで研修をさせて頂き感じたことは、日本にとっての環境に関する課題のいくつかが、ドイツではごく普通の人たちが参加しながら、ごく当

たり前に解決されているということでした。考えてみたら、多数の人々が無理な努力を続けなくては理想を保てない状態は、果たして理想的と言えるでしょうか。自然体で暮らしていることがそのまま持続可能な社会につながっている、そんな社会が理想なのではないかと思うようになりました。

ただ、現実がそのような理想の状況にないのであれば、それに向けて、働きかけることが大切です。ドイツ研修から帰国した僕にとって大切なのは、あるべき日本の未来にとっての常識をつくるために、今できることを実践すること。そのために、ドイツ研修で得た必要なことを4つにまとめ、みなさんと共有したいと思います。

1. 「未来の常識」の実行のために、みんなの力を借りる！

Alzeyという町に、ファルツ州では唯一の公立の幼稚園があります。この森の幼稚園は、もともと2人のお母さんが、森の幼稚園をつくりたい！と町長にかけあったところから始まりました。当初は、町長から「そんな幼稚園、つくたって誰も自分の子どもを行かせたいと思う親はいないでしょ？」と言われたそうです。お母さんたちはそこで諦めず、森の幼稚園を求める保護者約30人を集めて、もう一度かけあったそうです。その9か月後、森の幼稚園が開設されました。今では園児20人が毎日森の中で遊ぶ光景が日常になっています。同じ思いを持つ人々の力を借りて、ニーズの存在を的確に伝えることで、Alzeyという町で子どもの保育に関する常識を変えた一例です。

会員数50万人以上を有するドイツ自然保護連盟（NABU）のラインヘッセンナーエの地域支部で広報官を務めるミシャルスキー氏は「会員や、地元の人たちとの協力関係を築いていくことが大切。会員はもとより、会員ではない人たちとの協力関係も築いていかないと、活動が進まない。」と言います。この地域では、フクロウ、ハヤブサ、コウモリ、ミツバチ等、減少しつつある動物の保護活動等を年間140実施しています。この地域の人口の1%に相当する1万人の会員の方々や、その他、活動に関心のある方に向けて、これらすべての活動の日程・時間・場所を掲載した年間パンフレットを、2万冊を配布しています。その他に、年に1回発行する活動報告書を会員向けに配布したり、団体概要フライヤー等を町の施設やお祭りの機会に配布したりしています。活動内容を新聞記事で取り上げてもらうために、自ら記事を書いて新聞社に寄稿する

ともおっしゃっていました。ミシャルスキー氏はこんな言葉を引用されました。「良いことをしなさい、そのことを伝えなさい、そうしないと、あなたのした良いことを人に知ってもらえない。」慎ましく密かに活動することを否定はしませんが、活動による効果を高めていくためには、広く情報を伝え、参加の機会を示し、活動の担い手へと促して行くことが大切だということ学びました。

2. 「未来の常識」の計画は、明確に！

みんなの力を借りるには、様々なお願いをしなくてはなりません。

NABU ラインナウアー自然保護センターのエーゲリン氏は、ボランティアを募る際に、「全体のことに對して漠然と募集しても集まってこない。」と言います。プロジェクトの目的、時間、そして活動内容を、明確に伝えたいと、「どんな関わり方ができますか？」と、相手の視点に立って尋ねることが重要だと言います。

これは、ファンドレイジング（資金集め）にも同じことが言えます。ドイツにはファンドレイジングについて専門的に学ぶ事ができるファンドレイジングアカデミーがあります。ここで講師を務めるリットーショフェル氏は、寄付して下さった方々には、「この団体やプロジェクトに寄付して本当に良かった」と寄付者の方に思ってもらえるかどうか、最も重要なことであると説明し、そのためには、ファンドレイジングを行うプロジェクトの目標や、目標を達成するために何がどのくらい足りていないのかを明確にした上で、協力をお願いすることが重要だと言います。

このように、多くの人々を巻き込み共感を得るためには、プロジェクトの目的・期限・内容についての計画を明確にする必要があります。

3. 「未来の常識」の実現のために力を借りた人には、心からの感謝を！

ドイツには、「日が沈む前に感謝の意を表しなさい」という言葉があるそうです。これは、感謝はできるだけ早く伝えなさい、ということなのですが、それはつまり相手の立場に立った感謝の伝え方をしなさい、ということです。そのためには、寄付者等、協力を得た人たちのことを、まずはよく知ることが大切です。そして、その人の性格や特性に合わせた感謝の伝え方をすることが重要です。

感謝を伝えるのは、相手が企業でも同じです。NABU ラインナウアー自然保護セ

ンターは、15年もの間、環境に配慮した洗剤を製造販売している会社「Frosh」と連携から継続した資金提供を受けています。センターでは、パンフレットを作る際には企業の名前を入れるようにしたり、プロジェクトが写真付きの記事になる時には、会社の人も呼んで会社の名前と顔も写真で載せたり、相手にとっても宣伝になるようなことをしています。そうすることで、企業にとっては宣伝になり、お互いにwin-winの関係を築くことができます。人と同じように、企業に対しても、協力頂いていることへの感謝の伝え方がある。責任者のエーゲリン氏は、このように長く協力関係が続いている秘訣について「良い仕事をするのだよ」と一言で答えてくれました。その言葉の裏には、協力いただいた方々に向けた、きめ細やかな配慮がにじみ出ていました。

4. 「未来の常識」が長く続くために、しくみをつくる。

様々な協力を得て活動を実行できたとしても、1度きりで終わってしまっは、「常識」にはなりません。

BUNDは他のグループと連携して、一度は絶滅してしまったルックスという野生のネコを、動物園で飼育されていたものを元に繁殖させて、自然に戻す活動に取り組んでいます。ただ、ルックスは羊を食べてしまうため、地域の羊農家からは懸念の声が挙りました。BUNDは根気よく調整を続け、万が一ルックスが羊を食べてしまった場合には政府から補助が出るような制度をつくりました。継続的なしくみをつくることで、その場限りの「説得」ではなく「納得」してもらえるように働きかけました。対処療法的な取り組みではなく、地域において継続的に続いて行くためのしくみをつくる必要があります。

② 研修を通して、日本の環境ボランティアリーダーを支援するために、どのような仕組みが考えられるか。

「環境ボランティアリーダー」を、「環境に関する課題について他人の協力を得ながら、率先して解決に向けて取り組む個人」のことだとすると、机上の学びではなく、常に実践から学びとることが重要です。また、このような環境ボランティアリーダーの支援は、同じような立場にある環境ボランティアリーダー同志で学び合うことが重要だと思います。これまで、SNSを使ったオンライン上でのコミュニティやメーリングリストでの情報交換の仕組みなどに参加した

こともありますが、環境ボランティアリーダーへの支援には向いていないと思います。

それは、活動現場でリーダーが抱える課題というのは、とても個人的な問題だったり、公に相談しにくいことが多々あるからです。こういった問題は多くの場合、オープンな場ではなく、個人的な相談など非公式な場と活動での実践を繰り返すことで解決されます。このような非公式なやりとりを可能にするのは、1対1の信頼関係です。そしてそのような信頼関係は、やはり顔を合わせて対話したり同じ体験を共有したりすることから始まります。したがって「環境ボランティアリーダー」を支援するしくみがあるとするば、リアルな場での顔を合わせたコミュニケーションによってリーダー同志の信頼関係を育み、困った時はいつでもお互いに相談し合えるという状況をつくり出すことが重要です。

一方、活動に参考になる情報を広く共有できるという意味で、オープンな場の役割もやはりあります。そのような場では、各地の環境ボランティアリーダーが、自分の地域で作上げた「しくみ」を共有できる機会があると良いと思います。環境ボランティアリーダーにとっては、ある地域の特別な活動を、みんなにとっての常識に変えていくことが重要で、そのためには優れた「しくみ」について理解し、地域での実践を通じてしくみを提案していくことが重要です。しかしながら、様々な場所で「活動」の報告はよく聞く機会がありますが、このような「しくみ」について学ぶ機会はあまりありません。従って、リーダー同志が集まり、何かを発表し合う際には、活動発表はほどほどにして、市民によって作り上げられた仕組みと、その仕組みがつくられたプロセスについて共有することが重要だと思います。恐らく、仕組みづくりについて発表できる人は数少ないのではないかと思います。私自身を振り返ってみても、活動の集積はあっても、仕組みに落とし込めた経験を尋ねられると、恥ずかしい限りです。でも、だからこそ、「こんな仕組みを新しく作って、こんなに社会が良くなった」という発表が次々されるような場になることを願って、取り組む「活動」ではなく市民が作り上げた「しくみ」とそれを作り上げるプロセスについて共有できる機会が、重要だと感じます。

③ 全体を通しての感想

冒頭でも触れたように、ドイツでお会いした方の多くは、実践的で、でも肩に力が入っておらず、自然体でした。森の幼稚園を見に国有林に行った時には、犬の散歩を（リードなしで！）している人や、サイクリングやジョギングをしている人がたくさんいて、ドイツの人々の暮らしぶりに、ちょっと羨ましい「余裕」を感じるが多々ありました。

NABU や BUND 等の会員 50 万人のうち、アクティブに活動する会員は全体の 10% 程度だそうです。残りの 90% の会員は、特に活発な活動をするわけでもなく、会費を支払うという形で淡々と応援しています。ただ、裏を返せば、そういう活発ではない 9 割の人々が、50 万人という団体の規模を支え、そうすることで、環境団体が社会に対する影響力を持つ大きな役割を果たしているというのは重要な事実です。「ロビー活動をするには数の力が必要だ」というような戦略思考型の活動家と「子どもたちを自然の中で遊ばせたい」というような現場実践型の活動家と併せて、「ただ会員になっているだけさ」という活動なき活動家を増やしていくことが、見たい夢を「未来の常識」にするには、とても重要なことのように感じました。

ドイツで体全体に感じた、言葉にできること・できないこと、できる限り多くのことを現場の活動に活かして行きたいと思います。

以上